『グローバリゼーションと郊外社会の変容』

—「郊外」研究の可能性をめぐって—

浦 野 正 樹

はじめに

郊外研究は、1980年代から1990年代にかけての都心及び都心周辺、インナーシティにおける地域社会の変貌への関心の時期を経て、改めて注目されつつある。その背景には、郊外地域における少年犯罪の発生、家族関係をめぐる各種のひずみの顕在化、ニューカマーズの進出などを含む地域住民構成の変貌や社会問題の発生などがあると思われる（若林他、2000）。

そうした状況を受けて、日本都市社会学会でも2000~2001年度の２年間、「郊外研究の可能性」をめぐるテーマ・セッションを設けて議論を行っている。筆者もそのなかで報告を行ったが、本論文ではそれら一連の議論をもとに、「郊外」研究の可能性と方向性について、グローバリゼーションと関係づけながら論じようと試みた。

2000年度の日本都市社会学会シンポジウムにおける整理（三隅、2001）にもあるように、隣接領域からの「郊外」研究への貢献は、大きく２つの興味・関心の方向があり、相互に大きく分裂しているように思われる。ひとつは、人口・産業・その他諸々の集合的消費手段の都市圏域内での配置の変化をマクロに描き出し、その変動を近年の世界を覆う動向と結びつけながら論じていく方向である。もうひとつは、現代文化論・風俗論的な把握のなかで郊外生活者の生態や意識を描き出していこうとする方向である。

これら両者をつなぐ回路は未だ弱く、相互の連関（及び連関のしかた）は、必ずしも明確ではない。2000年度に行われたシンポジウムでは、「郊外」社会への切り口として、高齢化が進行していくなかでの「郊外」社会の変容と、郊外化のなかでの鋭敏な「階層性」の出現が指摘されたが、それらは一つの系であり、上記の回路に関わる記述の可能性をさらに高めて分析を深めていくことが、都市社会学の内在的な「郊外研究」を進めていくためには必要になる（日本都市社会学会、2001）。

とくに両者の回路のギャップを埋め繋いでいくためには、流動のメカニズム、すなわち人口・産業・その他諸々の集合的消費手段の配置変動を左右するメカニズムとその要因（例えば、人口移動であれば住宅ストック及び所得水準—家族発達段階ごとの住宅環境ニーズ—居住地選択過程なども勘案した移動メカニズムを視野に入れた経験的研究の蓄積）などへの着目（浦野、1987）、地方出身者の都市への定住過程と都市圏域拡大過程（郊外地開発と住民の移住過程）との相互関

連への着目、さらに都市への定住者＝郊外移住者の経験した集合的な体験への着目など（浦野他、1990; 1994）が必須であり、郊外社会の歴史的形成過程とともに、個々の郊外地域の歴史（的固有）性を意識する必要がある。

全般的に言えば、郊外がいわゆるサバーバニズムへの志向をもつものとしてひとくくりにされる比較的均質性の高い都市空間であるか否かは、再審に付される必要がある。現代社会では、郊外社会は、ますます都心部と同様に、多彩なバックグラウンドをもち多様性を内包した都市空間へと変貌しつつあるように思われる（Soja, 2000, Chap. 8）。

都市現象をその時代時代の傾向のなかで、全体像として把握し提示したいという欲求は常に思想家、評論家のみならず、都市研究者たちにもある。近年の郊外研究への興味と関心も、郊外社会の変貌とそこで起こる少年犯罪などの特異現象をどのように見るか、そこに現代社会のひずみを鋭く見つめようとするまなざしがあることはいうまでもない。

そうした誘惑や魅力は確かに強く、時代の変化と断絶を抉り出すという点ではそうした見方は有効でもあろうが、郊外社会の変貌を連続のなかでの変質として描き出し、そこで「断絶」として映し出された事柄の意味を改めて問い直していくためには、人口流動のプロセスとそのメカニズム、その過程で得られる人々の生活体験を丹念に追っていく作業が同様に欠かせない。

1. ＜都心―郊外＞関係の変容とグローバリゼーション―関係性の再考に向けて―

都市の中心機能の背後にあるものが、大きな時代のうねりのなかで変容しつつある。隣接領域における郊外研究の成果は、人口・産業・その他諸々の集合的消費手段の都市圏域内での配置の変化を写し出しており、従来比較的均質な空間として、サバーバニズムの枠組で理解されてきた郊外社会のイメージも再検討を要する。転換期といわれる時代の特徴として、産業型都市からポスト産業型都市への転換などが言われて久しいが、さらにグローバリゼーションとの関わりでいえば、従来、近代国家を中心にして構成されていた都市システムが、国家を超えた諸関係の意義の増大や国家の下位ブロックの自律化とその多様な連携への動きなどにより、理念的には相対化される傾向が進んできており、また現実の分析のさいにも、そうした変化を念頭においた分析が要請されるようになってきた。

20世紀末の約20年間に潜在的・顕在的に進んできた、地域社会を理解し眺める視点の変化は著しいものがあり、それらを＜グローバリゼーション＞や＜転換期＞という言葉を媒介にして（あるいはそうした概念と関わらせることを通じて）、これまで理解しようとしてきた。これはグローバリゼーションがひとつの典型的な時代の変化を浮かび上がらせうる言葉であったからではあるが、ここで起きた社会変化は極めて多面的なメカニズムと性格をもっていたと思われる。

ここでは、まず、グローバリゼーションを、最も一般的に、テクノロジーの進展による交通・通信手段の発展に支えられて、資本・商品・人間・情報の国境を越えた流通が拡大していく過程

として理解したうえで、そのもつ意味を押さえておこう。

グローバリゼーションは、「世界の圧縮とひとつの全体としての世界という意識の強化」として、それに伴って「ローカルな出来事が遠く離れた場所で起きた出来事によって引き起こされ、また遠く離れた場所で起きた出来事がローカルな出来事を引き起こすという形で、互いに離れたローカリティをつなぐ世界規模での社会関係」を深化・拡大させることとして理解される（Soja, 2000, p.191）。

グローバリゼーションの言説は、歴史性や地理性の観点からも検討されるべきである。資本、情報、労働力、商品などの様々なフローは決して非歴史的で空虚な空間を通り過ぎていくのではなく、多元的な社会的・経済的諸力の結節点が無数に存在する社会空間に織り込まれるのである。そこでは、様々な行為主体が、ローカルからグローバルにいたる多元的なスケールで同時に推し進める脱領域化と再領域化を通じて、構築されては解体する不断のプロセスが進行している。民族やエスニシティを取り巻く情景、メディアと文化現象を取り巻く情景、イデオロギーの形成・操作に結実する情景とも、関わりながら進行するプロセスをも念頭においたうえで、それらの矛盾・葛藤をはらむ過程を見ていく必要がある（下村恭広，2001a; 2001b）。

国民国家—国民経済—の形成とともに、文化的なアイデンティティが国家への忠誠心と統合されていく、そうした政治経済過程や文化過程などの「容器 container」であった主権領土が、いまや多層的なスケールにわたって再編成されている過程が、グローバリゼーションとして言われていることのひとつの側面である。問い直されるのは、空間だけではなく、時間と空間が互いに関連づけあう様式それ自体である（Taylor, 1996; Brenner, 2000）。

グローバリゼーションの過程は、同時に空間への新たな関心を増幅させていったといえよう。「空間論的転回」といわれる思想的試みがそれである。ソージャは、「空間論的転回」を、空間性を再考し、従来の空間認識のもつ歴史性や日常生活における空間の理解に注目し、空間の多様性を再確認することであるとして、多様な空間が創出されていく社会過程に目を向け、そこに様々な葛藤の争点が隠されていることを指摘し、そこに着目しようとした。（Soja, 1989 p.39）ここで言われる二つのポイント、すなわち＜空間の多様性＞と＜空間の創出過程＞について、下村恭広は、空間論についての文献サーベイを踏まえて、次のように整理している。

空間の多様性という点では、「空間の質的多様性」（物理的空間のほかに、心的空間、幾何学的空間、地政学的空間、想像の空間等々、多様な次元が折り重なった総体。さらにこれらの次元が相互に連関し、連接しあっている）と「空間のスケールの多層性」（身体から、近隣、地域社会と

いったごく身近な範域、地方圏ブロック、ナショナル、グローバルに至る幾重にも重なり合うスケール。それぞれの段階のスケールは所与でもなく固定的でもない、諸々の働きかけの社会的相互作用であり、歴史的に変化し続ける）が指摘される。

空間の創出過程という点では、「社会生活における多元的・多層的な空間は、つねに解体され、組替えられ、新たに再構築されており、不断のプロセスの中にある。社会的、経済的、政治的な様々な行為主体は、空間の次元やスケールのそれぞれに独特なかたちで影響を及ぼすと同時に、それらを創出していく（下村恭広，2000; 2001a; 2001c）。」

こうした空間の理解にたてば、ブレナーのいうように、グローバリゼーションの過程にさらされる都市・地域社会について、さまざまな力学と変動を内包し常に彫琢され造りかえられていく複数のスケールが重層したものとみる見方は、説得的である。

「都市、地域社会を、複数のスケールが重なり合ったものとして論じる必要がある。これは超国家的な地域統合、地方分権、都市のグローバルなネットワークの浮上、大都市の集積形態の変化、ローカルコミュニティの脱領域化と再領域化の表出とみなす観点が求められる（Brenner, 2000）。」

そのようなグローバリゼーションの過程で、都市中心部と郊外、あるいは大都市—地方中都市—地方小都市の都市間ネットワークも変容し流動化していく時代的な背景がある。こうしたなかで、改めて＜都心—郊外＞関係、＜大都市—地方都市—地方小都市—町村部＞関係を問い直す視点が要請されてきたといえよう。こうした中で、都市とセットにされた「郊外」社会の把握の仕方、都市と郊外の関係についての理解の仕方も、変容を余儀なくされる。

郊外社会を中心都市との関係で再考するさいにあたっては、少なくとも (1) シンボリズムとしてのアーバニズム／サバーバニズム、(2)「中心（性）」とそこからの「距離」の問題、とりわけ「距離」スケールの尺度やその意味の問題、(3) 都市圏域内の地域と地域との関係性、及び関係性を統御する力学、(4) 近隣、地域社会といったごく身近な範域から、地方圏ブロック、ナショナル、グローバルに至る幾重にも重なり合うスケールの様相、及びスケール間の関係の変化、(5) さまざまな主体が一定のスケールを創出し競合しあう社会力学的な関係とその変化、に目を注ぐ必要があろう。

こうした郊外社会と中心都市との関係再考にいたる問題意識は、ベクトルの方向性としては、「地域社会」での共住を介した社会問題の解決から、情報などを介したネットワークのなかでの社会問題の解決への比重の移行により、情報化社会のなかでの「地域社会」や集住現象の意味をあらためて問うことにつながるという論調とも響きあう部分があるが、その場合、情報を介したネットワークのなかで解決しうる社会問題の質、及び解決が可能になるしかけがどのような背景に由来するかを、慎重に吟味することがとくに必要になるであろう。

上述した問題群は、2000年度シンポジウムにおける若林報告の中での、「郊外」は「都市」との

関係の中で現われてくる領域であり、社会である。それゆえ、郊外について考えるためには、都市と郊外の「関係」について考えなければならない。現代社会において「郊」や「郊外」、suburb や suburbia であるということは、その場所がどのような社会的な位置を占めることなのか？という問いと呼応するものである（日本都市社会学会、2001）。

また、上述した問題群は、吟味していくと既にシカゴ学派内部でも限定的・部分的にではあるが、繰り返し問われた課題を含んでいる。ここでは、まず、シカゴ学派内部で行われた議論のなかから、＜都心—郊外＞関係の再考に関わる論点のいくつかを引き出してみることから始めてみよう。

ひとつは、バージェスの「求心的離心化」「求心的離心化システム」の概念である（Bergess, 1925）。バージェスの同心円理論は、背後仮説として都心を軸とした経済・政治・文化など多領域に及ぶ秩序化された構造が想定されており、したがって「郊外化」は同時にこうした中心地のもつメインストリームに組み込まれていくプロセスでもある。そうした前提の上で、バージェスは、副ビジネス・センター（sub-business centers）が外周の地帯（outlying zones）に発達し、この衛星的ループ（satellite loops）を通じて、より広範囲の地元地域社会（local communities）をより大きな経済単位のなかに押込めていくと論じた。これは、地元地域社会が顕在的、潜在的とにかかわらず、中央ビジネス地区の支配下にある副ビジネス・センターに合体されていく「求心的離心化システムへの再編過程（a process of reorganization into a centralized decentralized system）」である。バージェスの描くこうした地域変動は、既存の小さな都市や町村（集落）を都市の拡大過程のなかで飲み込み、中心都市の副ビジネス・センターに変え、そのヒンターランドを中心都市の圏域に変質させていく過程ということにもなる。これは、都市の拡大成長過程において、都市圏域内外の地域と地域との関係性が変質していくことであり、同時にそうした変化に至る動態や複数スケール間の関係の変化が生じるメカニズムについての言及である。別の言い方をすれば、都市拡大のダイナミズムの中で、上位スケールに飲み込まれていく地域と大都市地域との関係に変化が生じ、副ビジネス・センターにおけるかつての「中心性」がより広域な大都市圏域の新たな「中心性」と並立し部分的には競合しながら、中心—周辺の二重化が顕在化していくプロセスであり、とりわけ前述のポイントの（3）（4）（5）に関わった言及であるといえよう。これはまた、ポイント（2）についても、「中心性」の意味の重層化の問題を投げかけている。

ふたつめは、都市生態学の発展のなかで、繰り返し論じられてきたセクター・モデル、多核心モデルなどの同心円理論の発展型である。セクター・モデルは、いうまでもなく、放射状に伸びる交通の軸線に沿って、ある特定のタイプの地域がある特定の方向に扇形に発展するという都市発展の構造モデルであり、多核心モデルは、従来のモデルのように一つの都市核ではなく、複数の都市核を想定して、これら複数の都市核を中心として、周辺の土地利用が決定されてくると考える構造モデルである。こうした複数の都市核が形成されるのは、別個の都市核をもった都市が

合体した場合や新たな都市核が分離されて出現する場合が典型であるが、異なる領域における集積メカニズムが競合し錯綜しながら重層化して現れてくる可能性を示唆している点で興味深い。仮に「中心性」を前提としたとしても、都市の社会—空間構造がどのようなパターンに従うか、すなわち空間的広がりのメカニズムは、社会構造を構成する次元によって異なる（松本康、1995）し、さらにその「中心性」自体の様相が、次元の違いによって異なってあらわれうる可能性がある。このように、セクター・モデルは、中心と周辺との関係や周辺への発展のメカニズムが、同一のパターンではなく、都市の異なるセクターによって異なるかたちであらわれうることを示唆している点で、また、多核心モデルは、複数の（異なる機能をもちうる）中心が併存し、それらが競合し相互作用しあいながら都市の空間構造を左右していく可能性を示唆している点で、ポイント（2）で指摘した中心性や、中心からの「距離」スケールの尺度や意味を再考させる契機になる。

みっつめは、文化生態学が開拓していった学問的蓄積である。ファイアレイは、「経済的な要因だけでなく、空間に準拠する感情やシンボリズムといった要因も、土地利用を規定する要因となる」として、ボストンの伝統を体現しつつ遷移地帯の一角を高級住宅街として維持する活動を進めるビーコン・ヒルや、独立革命の史跡が集積しているがゆえの聖地化をはかるボストン・コモン、移民の集住の継続によって地域特性を維持しようとするノースエンドのイタリア人コミュニティの例をとりあげた（Firey, 1945）。このように、文化生態学は、文化現象のなかで相互に相対化された＜極＞を想定しうるフレームを用意しており、必然的に都市内部に複数＜極＞の併置を想定する。ただし、＜極＞と＜拡散＞との関係は、それぞれ固有の論理があるとはいえ、共通した同化のプロセスを想定しているという点ではバージェスの理論的な拡張にあたる。下位文化との関わりでいうと、都市の多彩な社会・文化現象が、ひとつのシンボリックな空間（例えば盛り場など）に凝集してあらわれ、その場所を核としながら都市域、さらにはその外周部へと広がり影響力をもっていく、こうした構造を描き出したものと考えることができる。

こうした文化生態学を下敷きにしながら、フレージアは、黒人世界の文化的首都としてのハーレムを分析し、黒人がハーレムに始めて進出した地点を中心に、そこから時代とともに黒人の居住集積が同心円的に広がっていく様子を詳細にデータ分析し描き出す作品を残した。ニューヨークのハーレムとシカゴの黒人コミュニティの拡大過程を比較検討すると、次のような違いが明確であるという。「シカゴの黒人コミュニティの拡大過程は、ほぼシカゴ市の生態学的秩序に支配されているのに対して、ニューヨーク・ハーレムの黒人コミュニティは、その拡大過程においてかなりの程度の自律性を有し、あたかもひとつの自立的な都市（self-contained city）のように同様の同心円的なゾーンが仮定できる（Frazier, 1937; Allen & Farrell, 1982）。」

ここには、ポイント（2）（3）（5）で指摘した中心性や距離スケールの尺度の意味、都市圏域内の地域と地域との関係性、及び関係性を統御する力学、そしてひとつの圏域を創出し競合しあう

社会力学的な関係とその変化について、再考する契機が豊富に存在する。

これまでみてきたように、シカゴ学派内部においても、中心性や中心からの距離尺度の問題、地域性を形成する複数のスケールの問題、都市圏域内の地域と地域との関係及び関係性を統御する力学など、郊外社会と中心都市との関係を再考するにあたって参照すべき論点が多く含まれていたといえよう。

2. 都市の中心性と都市集積—ポストメトロポリスにおけるシネキスムの様相—

それでは、都市集積を作り出す中心性とは何か？ここでは、中心性の問題、都市の中心機能を軸にして、前述の問題群を考えておきたい。転換期といわれる時代の特徴として、これまで産業型都市からポスト産業型都市への変換や、グローバリゼーションの流れのなかでの近代国家中心に構成されていた都市システムのゆらぎなどが指摘されてきた。ソージャは、この中心性を形作るもの、すなわち都市集積を呼び起こすものの背後のメカニズムが大きく変化する時代に突入しており、現代は新たな都市革命の時代を迎えているのだという。

ソージャは、この中心性を形作るもの、都市集積を呼び起こすものをシネキスム（Synekism）という言葉で表現し、その起源と集積メカニズムの歴史的変化を近代に至る三段階の都市革命というかたちで考察する（Soja, 2000）。ソージャによれば、シネキスムとは経済地理学において「集積の経済」と呼ばれるものを指しており、居住地の地域システムの中心地とそれに依存する後背地の、ネットワークの結節点として発生する高密度の集群であり、そこから社会的・経済的な諸力が生みだされるとする。ソージャは、シネキスムは、結果としての物理的凝集性を指すのではなく、それを生み出す過程に着目した用語で、現代においては、都市の結節性や求心力が働く様式における根本的な転換への着目がとりわけ重要であるとしている（Soja, 2000）。

経済・政治・文化（およびそれらの下位領域）など、複数の領域分野における中心性が重なり合うメカニズムは、ある一定の社会経済文化的背景に依存しており、重なりを強めていく「条件」があるのではないか？それが、新たな段階の都市革命の中で大きく変貌することにより、異なる集積の様相をみせていくのではないか？ソージャはそうした問題意識で、ロスアンジェルス大都市圏をポストメトロポリスの色彩を強めた都市として分析する。

それでは、ソージャは、都市集積を作り出す中心性とそれがもたらすダイナミズムをどのようなものとしてみているのだろうか。彼は、都市集積を作り出す中心性が形成されていくメカニズムを検討するさいに、アレン・スコットの産業集積のダイナミックス論を参照している。

産業的アーバニズム（industrial urbanism）を集中的に検討してきたアレン・スコットは、ポスト・フォーディズム的な産業メトロポリスを論じるにあたって、製造業問題における「柔軟なる特化（flexible specialization）」の議論を踏まえた上で、産業集積のダイナミズムを次のようにシネキスムと関わらせて論じている（Scott, 1995）。

アレン・スコットによれば、産業生産の主要な核のほとんどすべてが、シネキスムのより深くよりダイナミックな地史的なルーツをもっている。彼は、産業集積のダイナミズムを、ひとつは産業集積の初期の確立過程、もうひとつは確立後の成長のダイナミックスとして描く。

産業集積の初期の確立過程は、混沌としたはじまりを示す出来事やローカルな産業の先駆者や空間的に特殊なローカルな状況と通常関わる「思いがけない状況」の一セットからはじまる。アレン・スコットは、一般的抽象的な説明理論ではなく、個別具体的な「ユニークな出来事、個人、制度の予想できない地域的集中」を強調する。地域的な協定（慣習）の役割、取引以外の相互依存性（リフレキシビリティ）、学習、シネキスムといった、より柔軟な要素が、地域的創造性を生み出し、それら有用資源の活用により、初期の集積が実現する。さらに、ローカルな商工業組合や地元有力者たちによる指導的な活動が、文化的・技術的なセンスやスキルの発展をうながし資本化することにより、ローカルな産業集積が確立する。

第二のサイクルである、確立後の成長のダイナミックスは次のようになる。

(a) ある歴史上の一時期に、集積経済や労働市場の圧力による集塊作用は、初期のテクノポール、あるいは市の中心に近いプロト・テクノポールの成立を引き起こす。

(b) この初期のテクノポールの成長により、地価や労働コストは上昇しはじめ、地価等の安価な周辺部へといくらかの生産単位を脱中心化する。

(c) 徐々に、経済の集塊作用の引力により、これら脱中心化していった生産単位が、郊外の一地域に集積しはじめ、郊外で初めてのテクノポールを形成していく。

(d) 新しい郊外のテクノポールは、全体的な産業の拡大よりも速いスピードで急速に成長しはじめる。一方、都市の中心にあるテクノポール自体は、集塊作用の反経済性や地価の高騰がある限界を越えた時、衰退しはじめる。

(e) 産業的な発展が続く限り、このイベントのサイクルが繰り返され、新しいテクノポールが古いものから生まれて循環していく。

アレン・スコットは、以上のように、都市の中心性が生み出される源泉として、地域的創造性を生み出す＜より柔軟な要素＞を想定すると同時に、その産業集積の成長ダイナミズムにおいて、都市中心部に競合し集積をつくりだす郊外テクノポールとそれにより衰退していく都市中心部のテクノポールについて論じている。ポストメトロポリスにおけるシネキスムの様相は、アレン・スコットが論じているように、中心と周辺、都市中心部と郊外の関係を変質させる可能性を秘めているといえよう。

「郊外」が独自のネットワークをもち、旧来の「都市の中心」から相対的な独立性を保ちつつ変化・発展していく可能性は今後あるのだろうか？それを予測することは早計ではあるが、今後、旧来の「都市の中心」よりも広域なスケールの中心との関わりで生じるメカニズムは現在でも充分考えられうるし、＜郊外地域＞がグローバルなつながりを強めたり、地域の独自性を強調した

ネットワーク形成をはかったりする試みは現在すでに進行中であると考えることはできよう。

このような空間形成をめぐる営為の総体を念頭において、「郊外」研究の可能性を考えてみる場合、これまでの試みに加えて、よりセンシティブにそのダイナミズムを捉えていくためには、アレン・スコットが＜より柔軟な要素＞としてあげたような、人間的な営為の中でつくりだされる新しい関係性と、それが切り拓く関係性の広がりを実現するための舞台装置を検討の対象に加えて論じていく必要があろう。

ところで、こうした枠組は、たとえば、アーバニズム論―都市コミュニティ論―住民運動論（運動のシンボル化）や、アーバニズム論―結節・統合機関説などこれまで充分大きな研究領域として位置づけられながら、必ずしも相互に明確に関連づけられてこなかった諸概念を接合する可能性を同時に秘めているのではないか。

3. 郊外研究の展望―移動メカニズムと移動者・移住者の体験への接近―

前節において叙述した＜都心―郊外＞関係（とその変容）を前提として、それぞれの歴史的局面での移動のメカニズムが成立する。ここでは限定的に、大都市圏域内での人口移動にのみ着目すれば、マクロな経済現象（不動産資本の動向、産業の集積と産業構造変動、住民階層ごとの経済力の動向等）と政策誘導があいまって、それに生活水準に合わせた住宅・居住選好が交叉するかたちで、移動メカニズムが説明されうるであろう。

日本において、いわゆるサバーバニズムに代表されるような郊外化へのイデオロギー的誘惑がどれほどのウェートを占めてきたのかは検証しがたいが、それぞれの時代の限られた局面でみると、ある程度の推測をすることは可能かも知れない。とくに、日本の場合、持ち家志向が何によって誘導されてきたのか、個別の住宅面積規模ごとの住宅建設動向を見ていくことが重要だと思っている。

さて、そのうえで、この論文の冒頭でみたようなマクロな政治経済的変動と、現代文化論的な社会関係・意識の側面との回路を探っていくためには、郊外社会の変貌を主題にした地域研究に加えて、ある意味で当然のことながら、従来の郊外研究ではあまり明示化されてこなかった移住者の＜移住の契機＞＜移住方向＞と＜移住体験＞への着目が、決定的に重要になる（広田、1997; 浦野他、1990）。この点では、移動・移住者の視点から、その光景をながめ、地域社会との関わりや地域社会での生活の意味付けを描きだしていく試みがモノグラフとしてもっと分厚くあってよい（生活史研究、近年のエスニシティ研究における移住者と移住プロセス・体験の研究などは、この点からも評価すべきだと思う）。見田宗介が「まなざしの地獄」（『現代社会の社会意識』1979）で描き出したような移住者をとりまく状況を移住者の視点から描き出す作品が、郊外研究においても必要になるであろう。

その場合、移住のイニシアティブを握る世代の＜移住とその体験＞はもちろん重要であるが、

日常体験のレベルではそうした移動世代だけではなく、世帯主の移動による子供たちの移住体験や移住による親族関係への影響、などにも着目する必要があろう。文化評論の対象となりうる、親の世代と子供の世代での意識のズレやギャップ、そこで発生する精神的・社会文化的ストレスの影響なども、郊外化過程のなかでの影響や文化変容という観点からすれば、フォローする必要が出てくるかも知れない。

移動・移住体験とその階層性、そして背景としての歴史性を交叉させることにより、2000年度の都市社会学会シンポジウムで示された「高齢化」(過去の郊外開発のロジックに基づく、同一世代の集住の結果としての高齢化の急速な進展) や「階層化」(住宅市場の中での選好性により増幅された住宅階層への鋭敏な意識、さらに当初の居住改善運動から経過した時点での階層意識の顕在化など) のもつ問題がより鮮明になりうるであろう (日本都市社会学会、2001)。それと同時に、従来、郊外研究で蓄積されている＜新住層と旧住層との摩擦・確執＞や、コミュニティ論として扱われてきた＜郊外コミュニティの原体験とその希薄化＞(強烈な都市圏内移住体験の希薄化と移住の原風景の消失) などをより豊かに継承しうるのではないか。

かつて郊外移住の先端部では、交通機関・居住環境の未整備や生活上の支障等を、来住者たちがさまざまな活動を通じて整え克服していくプロセスがあった。そうした局面から、一定の集合的・共同的営為が成立し、それを契機にした人間関係・社会関係のひろがりも生まれていった。また、さまざまな居住環境を侵害する危険性をもつ開発プロジェクトや施設計画等に対する郊外居住者たちの生活防衛の試みもあった。したがって、これらの生活課題が、集住した住民全体を包含する社会的課題として浮上し共有化される過程では、共同で問題を解決する感覚と体験をもつことが可能になり、それを可能にするしくみの構築も実験的に試みられた (←住民運動とコミュニティ研究の蓄積／地域自治の可能性と実験)。

しかしながら、これらのすべてが商業化された商品価値として「建造空間としての郊外住宅地」に埋め込まれたとき、また、そのなかでプライバタイゼーションの結果として住民がそれら住環境のサービス受容者として振舞うようになったとき (この背後には国による一律の制度的対応のなかでの「制約」など政策的誘導も見え隠れするが)、社会関係は限定的で希薄なものになり、生活問題は個別化されたものとして映し取られ、生活体験も内向化し孤立化されたものに変質していく。住民の視野狭窄化は、「まちやコミュニティ」の視点から、さまざまな制度や状況の中で「ごく近隣」や「個人の敷地、住宅 (箱カプセルとしての住宅)」の視点への限定や比重の移行としてあらわれ、まちへの広がりは、(せいぜい) 点と点のつながりと、漠然とした郊外的ファッションとしてしか意識されなくなっていったのではないか。

この延長上に、一緒にいても互いによく知らずしかもハイスピードで動いている存在としての「共異＝共移体」(若林他、2000; 日本都市社会学会、2001) の世界があるように思われる。そのリアリティについては、今後の検証にゆだねられるが、こうした過程をあらためて考えてみると、か

つての郊外の先端部でのさまざまな住民運動とコミュニティの実践が、それらの場所の個性といかに結びつき、それを再確認・再評価・再編成するなかで集合体としての住民層に歴史的に蓄積され、集合的記憶としてストックされ残されていくか否かが、ひとつの分岐点なのではないかという印象をもっている。場所の記憶が風化し希薄になった共生感覚のなかで限りなく私的生活に沈潜する世界へのベクトルと、アンカーポイントを何らかの形で再構成しつつ（それが実現するためのしかけのひとつとして場所の個性の再構成・再生がある）共同運営の仕掛けを創りだそうとする営為へのベクトルが交叉するなかに、現代の郊外社会はある。

この点では、移住者の視点を組み入れた上記の分析と並行して、われわれは郊外においても場所の固有性の再編成過程をみつめ、郊外の場所の歴史的変容の中に、郊外移住者が創り出す社会関係を埋め込んだ分析などを蓄積していくことが必要なのではないだろうか？

【参考文献】

Abelmann, N. and Lie, B., *Blue Dreams*, Harvard University Press, 1995.

Allen, Walter R., and Walter C. Farrell, Jr., "Black Harlem Revisited: Patterns of Ecological and Social Organizational Change, 1940-1970", edited by G.A. Theodorson, *Urban Patterns: Studies in Human Ecology*, The Pennsylvania State University, 1982.

Appadurai, A., Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy, in Featherstone, M., *Global Culture: Nationalism, Globalization and Modernity*, SAGE, 1990.

Bergess, E. W. , The Growth of City, in M.Janowitz (ed.), *The City*, The University of Chicago Press, 1925.

Brenner, N., "The Urban Question as a Scale Question: Reflections on Henri Lefebvre, Urban Theory and the Politics of Scale", *International Journal of Urban and Regional Research*, vol.24-2, 2000.

Firey, W., "Sentiment and Symbolism as Ecological Variables", *American Sociological Review*, 10 (April, 1945).

E. Franklin Frazier, "Negro Harlem: An Ecological Study", *The American Journal of Sociology*, 43 (July 1937) 72-88.

広田康生『エスニシティと都市』有信堂 1997.

小井土彰宏「労働市場のエスニックな多元化と産業再編成」関東社会学会大会テーマ部会「社会構造の変容とエスニシティ」(2001. 6. 10. 開催)

松本康「現代都市の変容とコミュニティ、ネットワーク」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房　1995.

三隅一人「都市社会学的『郊外』研究のために」『日本都市社会学会年報』第19号、2001.

日本都市社会学会編「特集　郊外化のゆくえ」『日本都市社会学会年報』第19号、2001.

Scott, A. J. and Soja, E. W. (eds.), *The City: Los Angeles and Urban Theory at the End of the Twentieth Century*, University of California Press, 1996.

Scott, Allen J., "Industrial Urbanism in Southern California: Post-Fordist Civic Dilemmas and Opportunities", *Contention* 5-1, 1995: 39-65.

下村恭広「グローバリゼーション、ローカリティ、空間性」『市民と地域—自己決定・協働、その主体』地域社会学会年報第13集　2001a.

下村恭広「スケール再編としてのグローバリゼーション」『関東都市学会年報』第3号　2001b.

下村恭広「空間論の再考と都市・地域概念」第73回日本社会学会報告レジュメ 2000.

下村恭広「グローバリゼーション研究における地理的スケールの概念」第74回日本社会学会報告　2001c.

Soja, E. W., *Postmodern Geographies: The Reassertion of Space in Critical Social Theory,* Verso, London, 1989.

Soja, E. W., *Postmetropolis: Critical Studies of Cities and Regions,* Blackwell Publishers, 2000.

Taylor, P. J., "Embedded Statism and the Social Sciences: opening up to new spaces", *Environment and Planning* A, 28, 1996.

東京市政調査会編「特集　郊外化と都市社会」『都市問題』第93巻第5号　2002. 5.

浦野正樹「ゴミ処理とリサイクル」藤田弘夫・吉原直樹編『都市とモダニティ』ミネルヴァ書房　1995.

浦野正樹「都市と危機管理」藤田弘夫・吉原直樹編『都市社会学』有斐閣ブックス　1999.

浦野正樹「住民の地域移動と住みかえ―大都市圏流動層の形成と流動メカニズム―」小林茂・浦野正樹他編『都市化と居住環境の変容』早稲田大学出版部　1987.

浦野正樹・地域移動システム研究会編『豪雪を拓く―都市への他出者の視点からみた豪雪農山村―』早稲田大学文学部社会学研究室　1990.

浦野正樹・まつだい生活史研究会編『都市と農村のはざまで―＜資料編＞生活史ノート』早稲田大学文学部社会学研究室　1994.

若林幹夫・三浦展・山田昌弘・小田光雄・内田隆三著『「郊外」と現代社会』青弓社　2000.